

発達障害を抱える 子どもたちと学校介入

日本小児保健協会理事

埼玉県小児保健協会会長

Rabbit Developmental Research

平岩 幹男

学校から家庭へ

- 学校で対応しきれなくなったとき
 - 医療機関受診を勧める
 - 診断を受けてくれば・・・
 - 薬をもらってくれば・・・
- 学校から発達検査を依頼、児童観察を依頼
 - 判定変え
- 協議の場はなかなかできない
- 保護者がモンスター化

学校から医療機関へ

- 情報の提供は困難
 - 学校も医療機関も情報を出したくない
 - 個人情報情報の壁
- 医療機関の指示はしばしば現場を知らない
 - できるはずのない指示が来る
- 学校の要望はしばしば無理
 - 医療ですべて解決するわけではない
- 共通認識が必要だがそれはなかなかできない

共通認識が必要だが・・・

- 家庭も学校も踏み込まれたくないことが多い
- 医療機関はしばしばとても忙しい
- 家族が学校に見に行くこと
→そのときに問題行動が出るとは限らない
- 医師が見に行くこと
→いつでもできるとは限らない
- そして共通認識とそれに基づく対応はできない

IEP(個別教育プログラム)

- 発達障害を抱える子どもたちには必要
→何ができて何ができないかを明確にする
- 特別支援級・学校では一般に作成されている
→学校の中でできることが中心
→その他の社会資源・家庭との連携は？
- 通常学級に行っている子に対しても必要
→場合によっては相談機関で作成する
- 学校が作成すると「できること」だけ

学校では集団対応と個別対応

- 30人学級では30人に対応する必要がある
- 発達障害を抱えていれば個別対応も必要
- 担任一人ですべてはできない
- 通級、補助教員などのマンパワーも必要

- なによりも学校での共通理解
- 担任任せは学級崩壊のはじまり

就学前の事前相談

- 保護者と子どもと主治医で学校に
 - 校長、副校長、特別支援教育コーディネーター、養護教諭などいろいろ出てくる
 - だから意識の共有になる
- 希望は具体的に伝える
 - 慣れた先生、慣れた友だちの要望も
- 就学前から機会があれば小学校にでかける
 - 運動会、公開授業・・・などなど

就学前の資料の提出

- 就学前にはできること、できないことをリストに
→それによって学校で情報を共有する
- 定期的に仕分けをすることは自分にも役立つ
- できれば半年ごとに見直す
- とにかく学校に協力するという姿勢を明確に！
- 主治医も協力の意思があることも！
- 資料はチェックをしてもらってからが望ましい

就学後の学校とのやりとり

- 連絡帳を活用する
→感謝の言葉を忘れずに！
- 学校に行ったときにはクラスの様子を
→今日あったことを聞いて、家でもほめる
- 学校のモチベーションを上げる対策を
→主治医も学校をほめていた！
- 定期的に連絡をすることはとても大切！

現在の学校とのやり取りの問題

- うつ病
 - 存在を知らない
 - 不登校を恐れて休ませることに拒否的
- いじめ
 - 学校の中だけで解決したふりをする
 - 第三者の介入を嫌う
- 発達障害
 - 共通理解がなく、個人個人の理解で対応